

名古屋大学 農学国際教育協力研究センター ニュース

平成24年12月1日発行 通巻22号(年2回発行)

発行/名古屋大学 農学国際教育協力研究センター
〒464-8601 名古屋市千種区不老町

TEL 052-789-4225(受付) FAX 052-789-4222

<http://iccae.agr.nagoya-u.ac.jp/index.html>

e-mail:iccae@agr.nagoya-u.ac.jp

国際シンポジウム「農林水産研究 分野で国際的に活躍できる日本人 研究者の育成の現状と課題」

— 農学国際教育協力研究センター
第13回オープンフォーラム —

地球規模課題解決のため、国際共同研究、国際研究フォーラムや国際会議等の農林水産研究分野で国際的に活躍する日本人のプレゼンスを高めるにはどのような方策が考えられるか、そのための人材育成の取組の方向性はどこにあるか、海外から見て日本人が忘れていないことはないか。このような課題を議論するための国際シンポジウムが、農林水産省の委託を受けた事業の一環として、11月9日、東京・神田で開催されました。これは農学国際教育協力研究センターの第13回オープンフォーラムとして開催されたものです。

講演では、国際農林水産業研究センター(JIRCAS)の小山修研究戦略室長が「国際農業研究の動向と日本人研究者に求められる資質・能力」、国際協力機構(JICA)の熊代輝義農村開発部長が「農業分野における国際協力の動向と国際協力人材に求められる資質・能力」、九州大学熱帯農学研究センターの緒方一夫教授が「国際的に活躍できる日本人研究者の育成に向けた大学教育の現状と課題」、CEA-MEO-SEARCHA(東南アジア教育大臣機構・東南アジア農学高等教育研究地域センター)のエディサ・セディコール大学院奨学金担当マネージャーが「E-

nhancing human resource capacities in international agricultural research: Lessons and options for young Japanese researchers」、それにカタギ食品株式会社の高田直幸社長が「国際農業研究への期待と日本人研究者に求められる能力～民間企業の視点から」について、それぞれの立場からみた日本人研究者に求められる資質・能力や人材育成の取組について報告が行われました。セディコール氏から国際農業研究の現場で研究している日本人の人数は非常に限られている現実が指摘され、また、世界には研究者に限らず研究管理等の研究支援者、研究マネージャー、農業者など様々なキャリアがあることが述べられました。高田直幸氏からは基礎研究だけでなく、社会貢献的な性格を持った応用研究や技術支援または技術移転に活躍の場があること、また、国際協力に係わる大学教員の評価や長期海外赴任する場合の身分保障の問題なども出されました。

パネルディスカッションでは、上記講演者に農林水産省農林水産技術会議事務局の内川昭彦国際研究課長と総合地球環境学研究所の石川智士准教授をパネリストに加え、「農林水産研究分野で国際的に活躍できる日本人研究者の育成に向けた提言」と題した議論を行いました。パネリストだけでなく、フロアからも多くの意見が出されました。海外に興味を持っている学生は一定数いるので、そのような学生にどのように現場のおもしろさを体験させ興味を持たせて、研究者として育てていくのが重要で、そのための方策をたてることが大事であるという方向性が明らかになりました。農国センターはこれらの意見や議論をとりまとめ我が国の取組の方向性に関する提言としてまとめることとしています。なお、パネルディスカッションの記録や提言の内容は、農林水産省と相談の上、公開する方向で考えています。

(浅沼修一)



若手研究者を育てよう、みんなで

名古屋大学農学部学生の海外実地研修に濱口名大総長が参加

名古屋大学農学部資源生物科学科では、タイ国のカセサート大学 (KU) およびカンボジアの王立農業大学 (RUA) との学術交流協定を基に、学部学生の交換プログラムを実施しており、今年で5年目になります。交換プログラムは2つの研修から成り立っていて、海外実地研修は、名古屋大学の学生が相手国に訪問する研修で、一方相手国の学生が名古屋大学を訪れ海外学生受け入れ研修を行います。この研修の実施には、農国センターの教職員がその立案、準備、実施に深く関わり、財政的な支援も行っています。また、研修地の一つとして選んだRUAには、2000年から農国センターが支援を続けており、現在も、獣医学部の充実強化やJICA草の根協力事業による農産物加工技術振興などを通じ、人材育成、技術開発、共同研究を行っています。

2012年11月20日～12月2日に実施した海外実地研修では同学科の学生29名およびリサーチアシスタント7名を9名の教員が引率しました。学生はフィールドワークをそれぞれの国の学生とチームを組んで、主に、政府機関、民間業者、農家に対して聞き取り調査を行い、報告をまとめる作業を共同で行いました。また、11月23日・24日の両日、濱口総長はプノンペンを訪れ、RUAとの全学学術交流協定を締結し、その後このフィールドワークに参加しました。学生たちは、総長及びRUA学長らの前での合同発表会を行い、この研修を通じて目覚ましい成長を遂げた姿を披露しました。(山内 章)



RUAにおける農産物加工技術振興プロジェクトについて、農国センター浜野研究員から説明を受ける濱口名大総長とノブントンRUA学長



名古屋大学と王立農業大学との学術交流協定調印式(2012年11月24日)



名大生とRUA学生がフィールドワークで聞き取り調査を実施した農家と濱口名大総長

カンボジアの一村一品製品として認定:米蒸留酒「Sraa Takeo」果実酒「Tamarind Liqueur」

農国センターでは、2008年より文部科学省科学研究費補助金、文部科学省「国際協力イニシアティブ」教育協力拠点形成事業、JICA草の根技術協力事業を通じて、カンボジアにおける酒造業をはじめとする伝統的な農産物加工産業の振興、王立農業大学の人材育成に取り組んでいます。これらの取り組みの一環として商品化を果たした伝統的な米蒸留酒「Sraa Takeo (スラ・タケオ)」と、これを用いて製造した果実酒「Tamarind Liqueur (タマリンド・リキュール)」が、2012年10月12日に、カンボジア国における一村一品製品として認定されました。また同月には、アセアンセンターが主催するアジア食品展にカンボジア産商品の代表としての出展を果たし、多くの日本企業に対して商品を紹介することができました。

カンボジア国政府は、貧困削減や国家の経済開発に向けて農業分野ひいては農産物加工業の振興の重点分野の一つとしており、特に農村地域における加工業の普及を奨励する目的から、日本の大分県を発祥とする一村一品制度を2006年に導入しました。同年からは、カンボジア国商業省を主体とした一州一品展示会が毎年開催され、州又は村における特産品の製造を奨励しています。しかし、ポルポト政権下での大虐殺を経て多くの伝統的な加工技術を失ったカンボジアでは、農村地域における加工業の普及は簡単ではなく、制度が整ってもなお一村一品としての認定製品がなかなか増えない状況が続いています。今回、農国センターの取り組みによる商品が一村一品製品として認定されたことで、農村地域における加工業への取り組みの活性化ひいては農村地域の貧困削減に寄与できることを願っています。(伊藤香純)



カンボジア国一村一品製品のロゴマーク

着任挨拶

前川 雅彦 岡山大学資源植物科学研究所 教授
客員教授（任期：2012年12月1日～2013年3月31日）

我々は作物自体の持つ作物力（さくもつちから）をどれだけ理解しているでしょうか？作物力を明らかにすることができれば農業への応用展開もかわってくるのが期待されます。現在の農業はエネルギー多投入で成り立っていて、そのことが地球環境に影響を及ぼしていることも事実です。私は、ケニア由来のイネ野生種オリザ・ロンギスタミナータを利用できる機会がありました。以来19年間この野生種と栽培イネの交雑後代に向き合ってきました。オリザ・ロンギスタミナータは5千分の1のワグナーポットで育てても、温室では3mぐらいの大きな生育を示します。この大きさに何か重要なものが隠されているものと思い、材料を作ってきました。今回、当センターの客員教授に就任することになり、当センターに蓄積されている有用な種々の知識を勉強させていただくとともに、こちらからの情報とあわせて国際協力できる材料育成の基礎を確立したいと考えております。



略歴 1954年2月福井県生まれ。北海道大学大学院農学研究科博士課程修了後、同大学農学部附属農場に助手として勤務。1995年に岡山大学資源生物科学研究所に転任し、2004年に教授、2010年から現職。

離任挨拶

前多敬一郎 プロジェクト開発研究領域 教授

2010年4月に着任し、2年3ヶ月でセンターを去ることになりました。短い間でしたが、農学部の海外実地研修を軸として、タイやカンボジアとの国際協力を進められました。これがきっかけとなり、いくつかの共同研究が生まれました。カンボジア王立農業大学と進めているカンボジア初の本格的国産牛乳に関する活動は、タイのカセサート大学の全面的な協力を得ながら、すべて現地ですべてのひとづくりが実施されています。これは偶然にもカンボジアとタイに教え子がいたおかげで、大学におけるひとづくりの重要性を実感しています。ひとづくりに必要なのは、お金ではなく、まず経験と知恵です。本センターが「大学」の農学国際協力の中心として、大学院教育をはじめとした高等教育により、国際的な指導者養成に力を尽くされんことを願っています。私も、東京大学の獣医学分野で、国際的なひとづくりに励むことにします。最後に、センターの益々の発展を願ってやみません。



略歴 1955年生まれ。1980年東京大学農学部畜産獣医学科卒業、獣医師免許取得。1985年東京大学大学院農学系研究科博士課程を修了（農学博士取得）、名古屋大学農学部助手に採用される。同講師（留学生担当）、助教授、教授（生殖科学研究分野）を経て、2010年4月より農学国際教育協力研究センタープロジェクト開発研究領域教授に就任。2012年7月から東京大学大学院農学生命科学研究科教授（獣医学専攻動物育種繁殖学教室）。

伊藤 圭介 農学知的支援ネットワーク(JISNAS)事務局次長/国際交流協力推進本部国際企画室特任准教授
（任期：2010年10月1日～2012年9月30日）

2010年10月より2年の間、ICCAEが事務局を務める農学知的支援ネットワーク(JISNAS)の運営を支援させて頂きました。慣れない大学での業務に戸惑うことも多々ありましたが、JISNASの運営委員、事務局員、さらに会員の皆様の国際協力に対する熱い思いに支えられ、任務を全うすることができました。大学組織としての国際協力サポート体制がまだ十分でない中、個々人が途上国の貧困削減に資する様々な農学研究活動を行っているのを見聞き、政府開発援助の実施を担うJICAの職員として非常にありがたく、また心強く感じています。

2012年10月よりJICAに復職し、現在は南米のパラグアイに赴任しております。パラグアイでは農村部における貧富の格差が大きな社会問題となっており、JICAは小農の自立化を目指した支援を行っています。

これからも大学関係者の皆様からのより一層の支援を賜りたくよろしくお願い申し上げます。

略歴 1971年12月名古屋市生まれ。北海道大学農学部農業経済学科卒業後、JICAに入団。JICAでは、ボリビア事務所、農村開発部、企画部などに所属。ボリビアでは、事務所では農業・農村開発分野を担当後、現地の大学院（NUR大学）に留学し修士号「持続可能な開発」を修得。2010年10月より国際交流協力推進本部国際企画室特任准教授および農学知的支援ネットワーク（JISNAS）事務局次長に就任。2012年10月よりJICAに復職、パラグアイ事務所へ赴任。



平成24年度JICA課題別研修コース

1. アフリカ地域 稲作振興のための中核的農学研究者の育成

本研修は、JICAがサブサハラアフリカの23カ国を対象として2008年に開始したCARDイニシアティブに対する全国の大学の協力の一環として、7月5日～8月3日まで実施したものです。研修内容は「コア研修」と「個別研修」の2部構成で、コア研修は、稲作の基礎知識や技術、論理的思考方法などを講義・実習や愛知県農総試の見学を通して習得させることを目的としました。個別研修は、研修員個々の専門研究を深めるため、京都大学、新潟大学、三重大学、山形大学及び名古屋大学等のJISNAS会員大学が個々の研修員に対して各々オリジナルメニューで行いました。研修員は自国の課題の把握と解決に必要な研究計画をアクションプランとしてまとめ、JICA筑波センターにおける他の稲作コースの研修員も参加する発表会で発表し、議論を通して相互に理解を深めることができました。研修員はガーナ、カメルーン、ウガンダ、スーダン、エチオピア、ケニア、タンザニア、モザンビークの8カ国からの9名です。（浅沼修一）



JICA中部でのインセプションレポート発表会

2. 土地利用と自然資源分析の情報管理技術

GISフリーソフトOSGeo4W7 (Windows 7-GRASS) やQ-GISを途上国に広めることを目的とする技術研修を、8月22日～9月21日、JICA中部で開催しました。ケニア、マラウイ、ブルキナファソ、カンボジア、インド、ミャンマー、アルゼンチンの7カ国、8名の研修員に対し、大阪市立大学、中部大学、産業総合研究所の研修講師が根気よく実技研修を行い、また、農業環境技術研究所、農林水産技術会議事務局筑波事務所、兵庫県立人と自然の博物館、京都府立大学、ファルコン株式会社では最前線のGIS研究や利用の実際を研修しました。これまで13年間で39カ国から88人の研修員を受け入れていますが、アルゼンチンが最も多く(13名)、研修員OBが自分の職場で研修を実施するなど、自国での技術普及の活動が展開されています。本研修は今年度で最後となりますが、アルゼンチンの事例のように、同一国内・国外の研修員OB同士が連絡を取り合い、お互いに研鑽し合うことが出来るようにサポートしていきたいと考えています。（浅沼修一）



研修講師と研修員

オープンセミナー（2012年4月～2012年11月）

回数	日時	テーマ	講師	所属
第1回	7月24日	気候変化・変動下での東アフリカにおける食糧・栄養安全保障の確保：稲作に関する研究シナジーの活用	ジョン・ムンジ・キマニ	国立農業研究所研究員（ケニア）/ICCAE客員研究員
第2回	9月28日	西アフリカ作物改良センター（WACCI）における稲分子育種協力の経験から	加藤 明	元農研機構北海道農業研究センター育種工学研究室長（元JICA短期派遣専門家、ガーナ大学西アフリカ作物改良センター）
第3回	10月17日	ネリカの穂ばらみ耐冷性に関するQTL解析および有望系統の選抜	ジョン・ムンジ・キマニ	国立農業研究所研究員（ケニア）/ICCAE客員研究員
第4回	11月19日	水田の硝化作用とイネの硝酸窒素栄養の可能性について	鳥山 和伸	独立行政法人国際農林水産業研究センター生産環境・畜産領域長